第45回 ギャラクシー賞贈賞式

テレビ部門特別賞の
倉敷ケーブルテレビ
清水幸太郎さんと
山陽新聞の高見幸義さん

マイベストTVグランプリ「歌姫」の磯山晶プロデューサー、
ヒロインを演じた相武紗季さん、脚本のサタケミキオさん

個人賞に輝いた宮崎あおいさん

視聴者プレゼンターの鈴木智子さん
から賞状を贈られる磯山さん

「篤姫」で実父を演じた
長塚京三さんからの
花束に笑顔

テレビ部門優秀賞（上から）
NHK柳川強さん、
毎日放送の奥田雅治さん、
琉球放送の野沢周平さん

テレビ部門大賞の
トロフィーを高々と掲げる
東海テレビの齊藤潤一さん

大賞作品プロデューサーの
阿武野勝彦さん

舞台に勢ぞろいした大賞作品「裁判長のお弁当」スタッフ

45回目の式典司会は
長野智子さんとジョン・カビラさん

第45回ギャラクシー賞贈賞式が、2008年6月3日、東京恵比寿のウェスティンホテル東京・ギャラクシールームで開催された。全国から集まった放送、広告、芸能関係者は約600名。テレビ、ラジオ、CM、報道活動の大賞、優秀賞が選出、発表され、喝采を浴びた。また、45回の節目を記念して、ギャラクシー賞45周年記念賞、視聴者の投票で選ぶ「マイベストTV賞」グランプリなどにトロフィーが贈られた。

ギャラクシー賞はテレビ、ラジオ、CM、報道活動の四部門制。今年も一年間の選考を勝ち抜いた作品が、贈賞式の舞台に臨んだ。各部門の大賞・優秀賞がここで発表・表彰される。期待が高まるなか、式典の幕が開いた。

■CM部門

表彰はCM部門からスタート。今期の参加数は三一六件（シリーズ含む）。ことしCM部門委員会が批評のテーマとしてきたのは〝テレビの媒体価値〟。テレビだからできる表現とは何かに真剣に取り組んだ作品を高く評価した。

優秀賞二本は、湖池屋「マヨポテトうすしお　コイケ先生シリーズ」と富士フイルム「胃篇」「乳がん篇」「月篇」。湖池屋はブランドを笑いに乗せて視聴者に届けることに成功した。富士フイルムは社員を通して企業の魅力を訴え、好印象を与えた。

大賞はピースヒロシマ実行委員会「ノーモア」に贈られた。作品は、核を保有する六か国を象徴する建造物が、核によって砕け散るCG映像が衝撃的なもの。ピースヒロシマ実行委員会委員長の木戸寛行さんはトロフィーを手に、「これから世界の広告賞にしらみつぶしに出品し、広告賞を媒体にしながら、戦争のない世界をアピールしたい」と抱負を語った。

■ラジオ部門

ラジオ部門の幕開けは、DJパーソナリティ賞。今年で十五年目、一五人を表彰してきたこの賞は、ラジオのしゃべり手に贈られる日本唯一、最高の権威といえる。今年度は広島で中高生に圧倒的に支持される「秘密の音園」パーソナリティ、中国放送の青山高治アナウンサーが選出された。

ラジオ離れがとくに激しいといわれる若年層。にもかかわらず、中高生をラジオに夢中にさせる青山さん。「いま、番組を聴いてくれている中高生が、十年後二十年後、家庭の中でラジオのスイッチに手を伸ばすという未来を作りたい」。ラジオを元気にする受賞の言葉に、会場から拍手が沸いた。

続いて番組表彰が始まった。今期の参加作品は八一本。入賞八作品の中から中国放送「がん難民の戦い～まだ救える命のために」、文化放送「火焔太鼓」、毎日放送「おれは闘う老人となる～93歳元兵士の証言」が優秀賞に。「がん難民」はがん医療を患者側から訴えた秀作ドキュメント。「火焔太鼓」は全編ナマ放送の意欲作。「おれは闘う老人となる」は九十三歳の元兵士・本多立太郎さんの決意と活動を伝えた力作。会場に駆けつけていた本多さんも大きな拍手を浴びた。

注目の大賞には、ラジオ黄金時代を髣髴とさせるTBS「文化系トークラ

CM部門大賞はピースヒロシマ実行委員会「ノーモア」。トロフィーを贈られる木戸寛行さん

CM部門優秀賞（上から）
湖池屋の小池孝さん、
電通の赤石正人さん

DJパーソナリティ賞は中国放送の青山高治さん

報道活動部門優秀賞（上から）
テレビ金沢の辻本昌平さん、
日本テレビの水島宏明さん

報道活動部門大賞は札幌テレビ放送、
果実酒問題を追った山谷博さん

毎日放送「おれは闘う老人となる」
の93歳元兵士、本多立太郎さんを
会場も賞賛

ラジオ部門優秀賞（右から）
中国放送の増井威司さん、文化放送の吉住由木夫さん、毎日放送の寺澤亮平さん

ラジオ部門大賞のTBS「文化系トークラジオLife」の
長谷川裕さんとパーソナリティの鈴木謙介さん

大賞の発表に互いを祝福

45周年記念賞の永六輔さんと、お祝いに登場した黒柳徹子さん

ジオ　Ｌｉｆｅ」に贈られた。

放送休止枠に出現した解放区。深夜放送の熱い時代がもどってきたかのようなトークが繰り広げられている。パーソナリティを務めるのは社会学者の鈴木謙介さん。舞台に駆け上がった鈴木さんは、ディレクターの長谷川裕さんと抱き合って互いを祝福。「自分が聞きたいものを作ろうとやっていたら、結果としてラジオの王道にたどり着いていた」という長谷川さん。「番組リスナーがホテルの外で結果を待っている。早く伝えたい」という鈴木さんの言葉が、番組とリスナーの強い絆を実感させる。大賞をリスナーに喜んでもらえる番組はほんとうに幸福だ。

■報道活動部門

今年の参加本数は二八本。庶民に寄り添うものが多かったという委員長講評どおり、受賞番組はいずれも庶民の視点に溢れていた。

優秀賞はテレビ金沢「人情物語　向こう三軒両どなり」、日本テレビ「ネットカフェ難民」キャンペーン報道。「人情物語」は同局の会長自らが地元を元気にしたいと企画したキャンペーン。「ネットカフェ難民」は、命名のインパクトと確かな調査報道で行政を動かす成果を収めた。

この二つを押さえて大賞に輝いたのは、札幌テレビ放送「北海道・ニセコ町の果実酒問題」。酒税法違反が合法に転じるまでを、庶民の視点でユーモラスに追いかけた。

報道部課長の山谷博さんは、「きっかけはペンション主人からの手紙で、今の酒税法は地方の文化をつぶしてしまうのではないか……と疑問が沸き起こった。祝杯は果実酒で」と喜んだ。

■ギャラクシー賞45周年記念賞

四十五年の歴史を記念したこの賞を贈られたのは、テレビ、ラジオの先駆者・永六輔さん。「どこまで続けられるかというときにこの賞をもらい励みになりました。テレビは見ません出ませんといっていましたが、これからちょっと出るようにします」と会場を沸かせた。

ＴＢＳ「誰かとどこかで」四十一年来のパートナー遠藤泰子さんから花束が贈られた。さらに式典の最後には、収録を切り上げてお祝いに駆けつけたという黒柳徹子さんが登場するサプライズまで飛び出した。

■マイベストTV賞

第二回マイベストＴＶ賞グランプリに輝いたのは、ＴＢＳ金曜ドラマ「歌姫」だった。贈賞式には、ヒロインを演じた相武紗季さん、プロデューサーの磯山晶さん、脚本のサタケミキオさんが登場。マイベストＴＶ賞のプレゼンターは、投票に参加した視聴者の中から選ばれた鈴木智子さん（埼玉県）。鈴木さんからクリスタルのトロフィーが贈られ、プロデューサーの磯山さんは笑顔を見せた。

鈴木さんは「笑い、切なさ、いろんな感情をくすぐられるドラマで、最後は涙、涙」と称えた。番組サイトにも再放送を望む声が溢れている。磯山さんは「放送中、視聴率に恵まれず自信を失ったが、この賞は視聴者の方に選んでもらった。番組が愛されていたのがうれしい」と喜びを噛み締めた。

■特別賞　個人賞

テレビ部門の特別賞は、倉敷ケーブルテレビ「くらしき百景　最終集」に。ギャラクシー賞の歴史の中で、テレビ部門でケーブルテレビが受賞するのは初の快挙。受賞に立ったのはディレクターの清水幸太郎さんと山陽新聞倉敷支社の高見幸義さん。審査員は「交流の楽しさと活気に満ちた生活情報番組のお手本」と評価した。「ディレクターはむしろ市民。地上波とは違う視点で、地域のよさを見つめていきたい」と清水さん。新聞、ＦＭとのメディアミックスも見事だった。

個人賞は、ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」の宮﨑あおいさんに贈られた。凛とした品格のうえにおきゃんな表情も見せる姫君を快活に演じている。ドラマの人気もうなぎのぼり。

会場にはアルマーニのキュートな衣装で登場。テレビについて感想を聞かれると、「一年以上ひとつの役を演じるのは映画ではできない。すごく勉強になる」とうなずいた。サプライズは「篤姫」で実父を演じた長塚京三さんの登場。「娘の受賞を祝っておいしいお酒が飲めそうです」と成長著しい姫を祝福した。

■テレビ部門

最後を飾るのはテレビ番組表彰。二三七本の参加作品から選び抜かれた一四本に賞状が贈られた。

優秀賞には、ＮＨＫ「鬼太郎が見た玉砕～水木しげるの戦争」、毎日放送「夫はなぜ死んだのか～過労死認定の厚い壁」、琉球放送「揺さぶられる歴史」の三番組が選ばれた。

ＮＨＫ柳川強さんは「アニメの力で若い人に戦争を伝えることができた」と手応えを語った。毎日放送の奥田雅治さんは（スポンサー企業の労災隠しを追ったことに対し）「こういう番組を作って放送できたことにテレビの可能性を感じる」と語り、琉球放送の野沢周平さんは「体験者が少なくなっていく中で、歴史書き換えに危機感を抱いた」と制作の背景を明かした。

そして注目のテレビ部門大賞は、東海テレビ放送「裁判長のお弁当」に決定した。東海テレビは第四一回に「とうちゃんはエジソン」で大賞を、第四三回には「重い扉～名張毒ぶどう酒事件の45年」で優秀賞を受賞している。

ディレクターの齊藤潤一さんは、ずっしり重たい大賞トロフィーを頭の上に高々と掲げ、喜びを全身で表した。「警察官、検事、弁護士と自由に取材できるのに、裁判官だけが取材対象外。裁判員制度を前に、裁判官の仕事、人柄を知ってもらいたいと思った」と制作当時を振り返る。プロデューサーの阿武野勝彦さんは、「番組は東海ローカルの放送で、しかも視聴率三％台。今日の受賞で、きっと編成がよい時間帯に掛けてくれるでしょう！」と語り、会場からは後押しの拍手が沸き起こった。「重い扉」もこのＰＤコンビの作品。秀作の全国放送がもっと活発になることを祈りたい。